

## 川島真著 『中国近代外交の形成』

茂木敏夫

### I

「普通の国」として、「責任ある」大国を志向し、現実においても一定程度その認知を受けつつある、今日の中国をどう理解すべきか？——歴史学の側からは、必ずしも説得力のある認識枠組が提示されているとはいえない。本書は、外交史の領域において、この課題に果敢に挑んだ大著である。

中国では、近現代外交史は、国民党や共産党の立場から、列強の侵略とそれへの抵抗、「腐敗した政府」の不十分な対応、革命外交による劇的な挽回、それを導いた「偉大な」指導者などが強調され、多くの「物語」が語られてきた。日本の研究もその「物語」から決して自由ではなかった。本書は、これら「価値の束」を相対化すべく、中華民国前期（1912-26年）に焦点をあてて、近年急速に公開が進んだ外交档案を博捜することにより「事実の束」を導き出していく。

その内容は、既に青山治世（『中国研究月報』681号、中国研究所、2004年）や谷渕茂樹（『史学研究』第249号、広島史学会、2005年）による書評において適切な要約がなされているので、ここでは簡単な紹介にとどめたい。四部構成からなる本書前半の第Ⅰ部と第Ⅱ部は、外交档案の叙述から抽出された「近代」、「文明国化」をキーワードにして、第Ⅰ部では外交行政、人事制度を、第Ⅱ部では不平等条約改正に関する政策理念や実行過程を分析する。後半第Ⅲ部・第Ⅳ部は「伝統」や「分裂」、「割拠」など、従来中国政治外交史の重要な論点が、档案などの史料から再検討され、第Ⅲ部では宗主権や大国化志向など「伝統」との関わりで語られてきた論点について、また第Ⅳ部では「分裂」として語られる、この時代の中央・地方関係について考察されている。全体として、著者自身、別の箇所でも本書を次のようにまとめている。

「十九世紀末から二〇世紀初頭の中国外交が「文明国化」を志向したもので、それは外交行政制度や不平等条約改正政策に反映していたこと、また「伝統」外交の引照基準とされる周辺諸国との関係では、それを「中華思想」や「朝貢体制の残存」と見るよりも「大国（列強）化志向」の中で読み込むほうが妥当と考えられること、そして従来「分裂」と

考えられていた当時の中国国内について、外交については中央・地方が連携し、また広東政府の政策なども北京政府との類似性が極めて多く見られることを指摘した。」(川島「中国が「普通の国」になる中で——中国研究の艱苦」『創文』463号、創文社、2004年)

## II

まず、本書の特徴とその研究史上の意義について、評者の関心に即しながら整理したい。

中国外交史研究は、坂野正高『近代中国政治外交史』(東京大学出版会、1973年)以来30年以上、新たに標準的なテキストが刊行されない「絶学」であった。坂野以後の中国外交史研究は、丹念に内外の史料をつき合わせていくことにより、日清戦争にいたる時期の精緻な歴史像を提示した佐々木揚の孤軍奮闘だったとあってよい。1980年代以来、朝貢システム論を先導した濱下武志が経済史から東アジアに内在する地域の論理を見出すなかで、東アジアの国際関係史にも一定の枠組を提示したように、この間、近代中国の外交や近代東アジアの国際関係に関する問題は、むしろ外交史以外の分野から積極的なアプローチがなされてきた。評者も近代世界とは異なる世界秩序やその理念に注目して、思想史の問題として、近代東アジアにおける世界秩序の変容を考えてきた。これらは外交史の外側からのアプローチであったためか、その関心は、秩序をどういう枠組で理解すべきか、あるいはその秩序はどのような理念で構想されていたのか、という大きな枠組に注がれ、外交の実際に関する実証は必ずしも十分ではなかったきらいがある。こうした研究状況にあって、本書は、同じ年に刊行された岡本隆司『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』(名古屋大学出版会、2004年)<sup>1</sup>とともに、この状況を突破し、大きく前進させた本格的な外交史の実証研究の成果である。

また、坂野の前掲書の副題が「ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで」であることに象徴されるように、中国外交史研究にとって20世紀初は空白だった(坂野自身の実証研究は19世紀半ばにとどまる)。そのため一定程度は研究蓄積のある清末を、現代中国に一気に直結させて語ってしまう弊も少なくなかった。その空白期間である民国前期を対象とした本格的な実証研究である本書によって、この時期の歴史的位置づけがなされた意義も大きい。さらに本書において抽出された「事実の束」によって、国民党や共産党のナショナリズム史観や革命史観による後世の「語り」(本書では「政治ディスコース」と呼ばれる)が相対化されたといえるだろう。

本書の特徴として特筆すべきは、同時代の北京政府の外交档案を縦横無尽に利用して同時代のコンテクストに迫ろうとする方法にあるだろう。これは、坂野の研究が「欧米日の史料から中国を包囲し、『大清実録』や『籌辦夷務始末』などの基本史料で内を固めるという方法論を採った」(34頁)のと好対照をなす。それは、交渉のやりとりそれ自体より「当時の中国にとっての外交の位置」(7頁)の解明を主たる目的とするために、当事者性、同

時代性にこだわることで、中国の側からみた同時代のコンテクストを再構築しようとするからである。外交档案の博搜という点で傑出した方法であるが、決してこれを絶対化せず、外交档案に強くこだわった方法のもつ可能性と問題点についても自覚されている(549頁)。「清季外交史料」編纂の意図を指摘する(630頁)など史料の性格やあつかい方(177頁など)にも周到的な注意が払われている。

また、第Ⅰ部・第Ⅱ部のキーワードである「近代」、「文明国化」は全体をも貫いており、安易に「伝統」や中国の独自性を持ち出さないことも印象的である。1980年代以降、大きな潮流となった「中国自身に即した」アプローチ(その重要な成果が、溝口雄三・濱下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える』全7巻、東京大学出版会、1993-94年であろう)の到達点を批判的に受け止めるなかで、90年代後半以降、世界的規模での共通性(類似性)や共時性として近代性を考える研究が続々現れてきているが(例えば、飯島渉『ペストと近代中国——衛生の「制度化」と社会変容』研文出版、2000年、吉澤誠一郎『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』名古屋大学出版会、2002年など)、本書もそうした潮流に位置づけられるだろう。

この姿勢は、「中国自身に即した」、本書のいう「内在論」が中国の独自性にこだわることによって、中国特殊論を誘引してしまうことに強い危惧を抱いているからでもある。たしかに伝統的側面が強調されることで、それは安易に現代中国にも直結されてしまい、現実の中国を見る世間の眼をますます中国特殊論にミス・リードしてしまう弊害も少なくなる。だからこそ、史料で明示的に「伝統」が読み取れない以上、それを「伝統」として説明する方法はとらない。これもひとつの見識だろう。

本書全体を貫く、この「文明国化」志向は、評者の近代思想史からも違和感なくうけとれる。19世紀後半に近代世界と対峙しつつ、清朝は伝統的世界を、実質は近代的支配に変質させる再編を行った。この再編は伝統的理念に拠って説明されていたが、日清戦争後の進化論の衝撃により、改革のモデルが過去の理想時代から現実の西洋に転換した結果、現実の西洋諸国を志向する再編に転換した。実質は近代であるが、そのモデルを自らの過去(伝統)に求めていた19世紀を「近代」的再編、モデルを他者(西洋)の同時代(近代)に求めるようになった19-20世紀交代期以降の再編を近代的再編と呼ぶ——これが評者の描く大枠であるが(拙稿「中華帝国の解体と近代的再編成への道」『講座東アジア近現代史』4、青木書店、2002年など)、文明国標準を受け入れて、その基準に達するよう努めるという思考は、周囲から文明国と認められることを欲するという意識を除けば(ただし本書では、この意識が重要視されている)、評者の西洋モデルとそれほど大きな違いはないだろう。また、近代的再編の行方について、評者はかつて『胡適日記』にある、個人の解放を重視した1923年以前と、民族主義運動・共産主義運動に取り込まれてしまった1923年以後の集団主義という記述を利用して展望したことがあるが(拙稿「中華世界の構造変動と改革論」『現代中国の構造変動』7、東京大学出版会、2001年)、光緒新政期から北京政府期を「文明国化」

志向、国民政府期以降をナショナリズムによる動員、革命外交という指摘（208頁）もこれと重なるところがあり、本書の大枠については十分首肯できるものだった。

### III

次に、本書を読むなかで考えさせられた点について、評者の研究も批判の対象とされているので、そのいくつかに応答するかたちで、本書の議論と課題とを整理したい。

本書では先行研究を整理するなかで評者の議論も近代的再編論としてとりあげ、批判的に検討している（42-44頁）。そこでは、再編後にどうなったのか、また再編された体制が個別の交渉過程でいかにあらわれたかについて、具体的な説明がなされていないことが指摘されている。「事実の束」を抽出しようという外交史研究からみれば、当然の指摘と思われるが、同時に、ここに評者の思想史のアプローチとの違いが垣間見えるようにも思われる。思想史的方法では、多くの場合、その時代の傑出した人物（あるいは事例）をとりあげ、その人物のテキストのなかに入っていく、そこに潜む論理を読み解いていくことで、従来の語りとの矛盾を見出し、それを突破口にしてコンテキストの再構成を試みる手法がとられる。誤解を恐れずにあえて単純化していえば、山の頂上から裾野を望み、全体像を構想しようとするわけである。その結果、テキストから抽出された論理と裾野に広がる個々の具体的な実際との間にはズレが生ずることもある。これに対し、本書は档案を広範に渉猟することにより、その裾野を「事実の束」による面として固めていくことでコンテキストを再構成しようという方法をとっている。例えば、第Ⅰ部第Ⅱ章で馬建忠という突出した人物の外交論を論じた坂野の研究を、広範な史料によって同時代の外交制度論のコンテキストに再定置していく作業などは、思想史のアプローチの限界を補うものとして、本書のとり方の強みが遺憾なく発揮されているといえよう。

といっても広く史料を渉猟することによって裾野を固めていく作業も、虚心坦懐に史料を読んでいけば自ずと固まっていくわけでもないだろう。おぼろげながらも嶺がイメージされているからこそ、裾野についても、それを裾野として認識し全体像が見えてくるのではないだろうか。档案史料と先行研究の論点との対話によるとされる第Ⅲ部・第Ⅳ部に比べ、第Ⅰ部・第Ⅱ部は「外交档案にそのまま表れる当時の目標としての」（4頁）「文明国化」「近代」をキーワードとしているとされるが、それほど単純なものでもあるまい。序論で数十頁を割いて先行研究の検討をしたことからうかがえるように、先行研究の論点が十分に消化されているからこそ、このキーワードが、史料を読むなかで自ずと浮き上がってきたということではないだろうか。档案を渉猟しながら、档案至上主義に陥らず先行研究を十分に消化し、自らの眼を鍛えていること、そこにこそ、本書の最大の強みがあるように評者には思われる。

評者へのもうひとつの批判は、伝統の「読み替え」に関する議論、すなわち19世紀後

半に朝貢・冊封関係による伝統的体制を、近代世界と対峙するなかで、近代的な属国支配に読み替えていったとする議論、そこに伝統の連続性を見出す議論に対する批判である。「中華思想や冊封外交における上下関係の「残滓」の有無などについて、史料から判読することは極めて困難である」(542頁)と、伝統の連続性を史料に即して相対化した意義は大きい。

しかし明示的に伝統を持ち出さないからといって、伝統ではないということにもならないだろう。テキストの叙述のパターンや思考のパターンなどを以て伝統の連続性と解する余地もあるだろう。例えば、中華世界の大国であったがゆえに、そしてそれが本来の姿だと考えるがゆえに、周辺の小国との対等ではなく、列強との対等を求めたり、本来大国であるがゆえに、不平等をいっそう恥辱と考えると読み解くことにより、伝統との連続性(あるいは親和性)を読み解いたりすることは不可能ではないように思われる。このようなかたちで前近代の歴史的前提を読み込むことも可能だろう。すると、伝統か近代かではなく、どちらで理解するのが有効かということになるだろう。その場合、何を、どのように問うかによって、どちらが有効かは異なってくる。王朝国家から近代国家へという側面から近代国家の建設を問う評者は、近代国家が自覚的に追求されるようになる20世紀初と対比して19世紀後半に注目するため、伝統の連続性を重視するのに対し、本書が近代を重視するのは、近代が自覚された20世紀を対象とし、民国前期の「文明国化」志向を、国民政府のナショナリズムや革命外交の語りから救い出そうとするためだからであろう。

また、例えば朝鮮との関係においては、朝貢・冊封関係の「伝統」が根拠として持ち出されているように、「伝統」が意図的に明示されることも少なくない。とはいえ、その際の「伝統」とは何かというと、それは「属国自主」が近代世界と対峙するなかで自覚され、再定義されていった、その意味でまさに近代の産物だったように(拙稿「中華帝国の解体と近代的再編成への道」参照)、近代という大きな枠のなかでの「伝統」の主張だった。本書でも「清朝が伝統に固執するとか、旧体制に拘泥したのではなく、むしろその時代においていかに生き残るかということ」(364頁)と指摘するように、近代において、自らの利益を確保するために「伝統」が利用されたわけであり、である以上、「伝統」より「近代」に利用価値がある場合には、ためらいなく「近代」が持ち出されるわけである。1876年の李鴻章と森有礼との会談において、「国家の大事はただどちらが強いか、力によるのみ」と露骨な力の論理を主張する森に対し、李が「力を待み条約を違えるのは、万国公法の許さざるところ」と応じたやりとりは有名である(『李文忠公全集』譯署函稿卷四「日本使臣森有礼署使鄭永寧來署晤談節略」)。朝鮮をめぐる日清間の対立では、朝貢・冊封の「伝統」を持ち出せば既得権として優位に立てる清朝に対し、その前提をもたない日本が自らを優位に置く言説として「開化」「文明」を持ち出したということもできるだろう。

すると、本書のいうように、この時期の再編は、大枠としては「近代」として理解すべきだろう。今度は、その「近代」のもとでの「伝統」の利用という理解が重要になってくる。

「文明国化」が明示的な課題となった時期において、「文明国化」するには独自の伝統が必要とされ、例えば 20 世紀初めにおける殷墟など古代遺跡の発見は、そのための資源として大いに利用されたわけである。今日においても世界遺産への登録をめぐる政策などにも見られるように、「偉大なる過去」やそれにもとづく「伝統」を保有することは「文明国化」「大國化」の重要な資源となっている。ここにおいて、どういう動機で「伝統」が利用されるのか、そしてそこにどのような換骨奪胎が起こるのか、そしてその変質した新たな「伝統」がどのように機能したのか等について、それを具体的に考えていく課題が見えてくる。そして、この課題は、本書においても自覚されているようである (542 頁)。

最後に、本書で示された史実を解釈する姿勢について。現時点で利用可能な史料に即して検討できるところまで検討し、史料がないところについては暫定的理解を示すにとどめておく、そしてさらなる史料の発掘を俟つという慎重さが印象に残る。それゆえ、検討しきれず、残された問題も少なくない。著者は、外交档案を駆使する研究のパイオニアとして、未開拓の荒野にせっせと鋤を入れて掘り起こしていく作業に徹しているかのようである。その力強さと志の高さとは称賛に値する。後学は、この荒野をさらに念入りに耕して沃野とし、そこから多くの果実を育てていくことが求められている。評者にとっても、本書において抽出された「事実の束」をしっかりと受け止めて、思想や理念について検討し直してみる必要も考えている。個々の事実と「事実の束」との関係や、その「事実の束」を束ねる理念や価値観について検討する必要もあるだろう。外交史から思想史に、新たなボールが投げられたと思っている。

(名古屋大学出版会、2004 年 2 月、661 + 32 頁、7000 円 + 税)

(もてぎ としお・東京女子大学)

---

<sup>1</sup> 岡本隆司は濱下と茂木らの議論について、「その裏づけとなる実証作業は、中国史・朝鮮史を問わず、なお「観念」そのものを対象とする思想史の文脈と方法でしか行われていない」と指摘している (『属国と自主のあいだ』387-388 頁)。

<sup>2</sup> かつて「9.11 以後」の状況をどう歴史的に理解すべきかという問いかけに対して、板垣雄三は、「対テロ戦争」を俎上にのぼせるとき、さまざまな大きさの「まな板」をあてがうことにそれぞれ意味がある。つまり、それは多様な時間的幅で検討すべき歴史的現象なのだ。その複合性・重層性の構造は、論者によってまた異なるものとなる。……歴史の記述は、重層的時間が相互作用する構造の中から、もっとも有意味だと考える部分を切り出す分節化の仕事だといえる (「対テロ戦争」とパレスチナ問題『歴史学研究』769 号、2002 年) と述べている。何を、どう問うのかによって、「多様な時間的幅」が考えられ、その時間的幅の「重層」のしかた、「相互作用」の絡まり合う実態を解きほぐすことが課題となるだろう。